

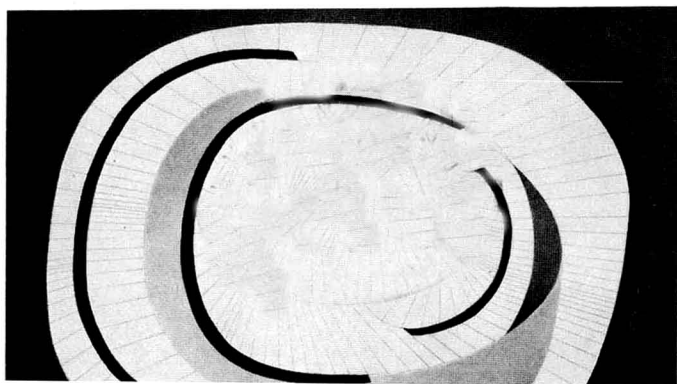
回 归 点

小林景子



回 歸 点

小林景子



回帰点

昭和五十四年五月二十日 初版印刷
昭和五十四年五月二十五日 初版発行

著者 小林 景子

装画 吉原 治良

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

振替口座(東京)〇一〇八〇二

営業三五五―五三二一

電話

編集三五五―五三二一

印刷・製本 中央精版

©1979 KEIKO KOBAYASHI

回 歸 点

1

待ちくたびれるほど電車は来なかったが、僕の神経は苛立ってはいなかった。ホームのあちこちで深夜の酔っ払いが、大声を張り上げて調子づばずれの歌を歌っていた。その歌声からふっと耳を離すと、僕までがつられるように鼻歌まじりになっている。

どうやら悪い酔心地ではないしかった。あれからそう時間は経っていないというのに、もうこんなにも酔っ払ってしまっている。しかもかなり気持よく。アルコールの力に感謝したいほどだ。……今だけはこの平和な酔心地が、アルコールのせいよりも、むしろ

Aのこと、原因しているとは考えなくなかった。Aと自分自身とを比較してみても、僕がけちな安堵感を抱いているとは思いたくなかった。いや断じてそんなことはない！こんなふうに酔っ払っているのは唯一アルコールのせいなのだ、と僕は頭の中に厄介な考えが浮かんできそうになるのを無理に押しとどめた。

冷たい鉄柱に寄りかかりながら電車を待つ間、だがふと気付くと、僕の眼が追いつづけているものはやはり、すっかり気落ちして蒼ざめたAの顔だった。Aの前途にあるものは絶望的な未来だけだと、二度と這い上れない深い穴ほこに落ちていった人間を上から見下ろすように、僕はAについてそんな考えまで巡らしている。……生活破綻者、社会失格者、人生落伍者……浮浪者、犯罪者……たちの群れ、その群れのなかに姿を消していくAの後姿が見える。だが彼らが深い穴ほこに向かってつい足を滑らせてしまったのは、単に彼らの、Aの、不注意や運の悪さのせいだったのだろうか。僕は力なく頭を振り、その頭をゴッソと鉄柱に打ちつける。

.....

Aと僕とそれから数人の会社の同僚とは、つい二十分程前まで、ひどく気詰まりな雰囲気の中、呑めば呑むほど場がシラけてしまうという具合の酒を、次から次に口に流し込んでいた。テーブルを囲んで僕たちはむっつりと、一度としてまともな会話を交すこと

なくただ酒を呑み、向かい合っていたのである。その約一時間余りのあいだ何度僕は、こんなことになるのは容易に想像できたのに何故あのとき誘いを断わらなかったのだろう、と悔やんだかしない。……しかし、

「Aが今夜出てくるんだってさ。ちょっと行ってやらないか、どうせ近くだろ」

と誰かがいい出し、残業をしていた連中の全てがそろって手を休め好奇心で眼を輝かせながら一斉に同意の声を上げたとき、僕はほんの一瞬躊躇しただけであっさり誘いに応じたのだった。そのとき僕が彼らと同様、Aに対してあからさまな好奇心を抱いたのを否定することはできない。僕たちはその後バタバタと仕事を片付け、十分後には会社のすぐ近くにある××警察署の玄関に駆けつけ、その奥からAが出てくるのをじっと待っていたのである。

Aは、会社の上司（らしいというだけで真相ははっきりしない）のクレジット・カードを盗用し、三十数万の品物を買ったのがバレて、警察に捕まっていた男である。また捕まる前までは僕と同じ会社、同じ課の社員でもあった。噂によると、被害者のその上司の計らいで不起訴になったらしく、それで今夜釈放されることになったわけである。だがむろんのこと会社は即刻クビだ。被害者であるのに何故その上司がAに対してそんな温情を示したのか、Aに相当弱みを握られていたのではないかと、僕などつい旺盛に想像力を

働かせてしまうが、とにかくAの言い分がどうであれ、会社とは如何なる理由があろうとも、一度警察のご厄介になった者を採用しつづけることは絶対にしない。——そのAと呑んだのだから、いくら何でも場が気詰まりにならない筈はなかった。親の葬式で呑む酒よりももっとまずい。

だがこっちは酒がまずいだけで済んだが、Aにとっては僕たちの行為そのものが、迷惑で無神経な偽善の押し売り、できたらして欲しくなかったものであったことは間違いないのだ。その場にいた誰もが何かをいおうとする度に、あわてて言葉を咽喉の奥に吞み込み、やがて口を開くことさえ諦めてしまったのは、そのことにイヤでも気付かざるを得なかったためだ。会社をクビになりしかも前科者同然になったAに対して、傷ひとつ受けずこれからも無傷でぬくぬくと生きていくに違いない僕たちが、いったい何をいうことがあったらう。

一時間程してAは便所に立ったが、そのまま帰ってこなかった。狭い店だから出ていく姿が僕たちの場所から見えない筈はない。きっと裏口からこっそり誰にも気付かれずに出ていったのだらう。だがそれ以外にどういう別れ方がAにあったらうか。それを思うと僕は居ても立ってもいられなくなり、また他の者も同じ気持だったらしい。

「馬鹿だよ、あいつは……」

誰かがぼつりと呟いたが、誰も答える者はなく、結局は気詰まりな状態のままその後しばらくして僕たちは店を出、別れたのだ。――

深夜の電車には、酔いつぶれた乗客が各車両にだいたいひとりはおり、そこまではいかにしても僕のように、アルコールの匂いを舐めながら乗客は十何人といった。だが不思議なほど車内に陽気さはない。ぐにやぐにやに酔ってさっきからドアの前で何度も尻餅をついている中年の背広（『国民服』）の男さえも、その様子は、滑稽よりも惨めな光景として眼に映る。この車両にいるほとんどの人間たちは、明日の朝になれば一分一秒を争ってあたふたとまた同じ電車に駆け込まねばならない同類の人間たちなのだ、という思いが次第に僕を惘然とさせていく。酔いが醒め、空っぽだった頭が何かに強く押さえ付けられたように重くなる。

僕は、Aが何故あんなことをしてしまったのかその気持がよく理解できる人間でなければならぬ、いや、数千人いる社員のうちAに最も近い場所にいたのがこの僕なのだ、という事件を聞いて浮かんできた一つの考えが、いままた頭に舞い戻ってくる。Aは表面上はひどく真面目でそのうえ善良な感じの男だったが、それは全て、内に抱え込んでいる憤懣や怨念を覆い隠すための仮面の印象にすぎなかった、少なくとも僕はそう観察していたし、それは当たっていただろう。あるいはもしも会社の中に友人をつくるとしたら、Aの

ような奴しかないだろうとも思っていた。——といって、一度としてAとは親密な話をし合ったこともなかったし、だからむしろ最後まで友人同士でも何でもなかった。会社での人間関係を私的なそれにまで延長したくない、という依怙地なまでの僕の主義からAともそういうふうにはならなかったのだが、Aも同じような理由で僕を含む全ての会社の人間を近くに寄せつけなかったのだろうと思う。

だがいま、あらためてAは僕以上にいや僕など較べものにならないくらい激しい憤懣や怨念を、その真面目で善良な仮面の下に隠し持っていたのだと、つくづく思わざるを得ない。会社の中であれほど孤立し疎んじられながら、あれだけ平然としていられたのだから、仮面の出来も僕のよりそうとう上等だったようだ。不断は周囲から白眼視され、何か問題を起せば容赦なく批難の的とされた彼を、僕はよくかばってやったものだが（多分そんなことをするのは他にひとりもいなかっただろう）、その僕にすらとうとう心を開かなかったぐらいなのだから……

しかしそれも当然といえば当然のことだ。僕とは、例のごたいそうな主義をかたくに守る一方で、滑稽なまでに自分が孤立してしまうのを恐れている人間なのだから。また終始仏頂面をしているようで、肝心なときにはちゃんと相槌を打ち適当にお世辞までいって、妥協する術をすっかり身に付けている男なのだから。Aから見れば美など頭でっかち

のふにやふにや野郎でしかなかったのだろう。心を開くには余りにも油断のならない相手だ。

ともかくAと僕との違いはもはや、決定的だ。Aは行き着くところまで行ってしまった人間だ。しかしその行き着いたところがどこであれ、Aの犯罪がただの出来心やけちな誘惑心に駆られた結果だとは思えないし、思いたくない。外見上は全くありふれた瑣末な犯罪ではあるが、たぶんAはそれに強烈な意志のようなものを注ぎ込んだに違いないのだ。

……だが、たとえそうだとしても、だ。……どうしても僕は、彼のときおり見せた、すばらしく切れ具合のいい頭や、考え深げに光る眼などを思い出しながら、ふと首をかしげてみざるを得ない。……ほんとうにAはあんなことで、長い間心の底に鬱積した憤懣や怨念を晴らそうと考えたのだろうか。上司のクレジット・カードを盗用するぐらいのことに、それほど大きな意義を本気になって見出そうとしたのだろうか。いやその前にAは、いったい何に対してそれほど執拗に憤懣や怨念を抱きつづけていたのか、はっきり見定めたのだろうか。

しかし僕もずいぶんつまらぬことを考えているようだ。何に、何に対して、憤懣や怨念を抱いていたのだろうか、だと？ 何を、Aは憤り、怨んでいたのだろうか、だと？ 冗談じゃない、全く冗談じゃない。そんなことを真面目な顔で考えてるオマエこそ、いったい何者な

のだ。

こうやって生きて呼吸しているのが空気のおかげであるように、僕を生かしつづけているあらゆるものに対して歯ぎしりするほどの苛立ちや腹立ちを、当の自分が感じていることを、もう僕は忘れてしまっているともいうのか。……僕がこう生きたいと思う前に、強引に僕のなかに割り込んできて、僕を引っ張りまわし、結局は、ありきたりの生き方しかさせてくれない強い磁力のようなもの。あるいは僕の意欲や行動力を徐々に虫ばみ、最後には何をするのも諦めさせてしまふ、手足に絡みついて離れないヌルヌルした藻のようなもの。だがそのためにいくら腹立ち、苛立ったとしても、そんな感情が心の底に鬱積し、押さえようもなく脹らんでいったとしても、一度それを爆発させてしまったら二度と元に戻すことができないであろう、自己の收拾能力の欠如……。そして象のようなしたたかな足取りとカモシカのような素早さで先へ先へと進んでいってしまう現実……とにかく僕という人間を丸ごと振りまわし、それに腹が立つからといって拒否するわけにはいかない、そんな現実の状況全体こそが、同じくAにとってもあったであろうことは、容易に想像できることではないか。それを僕は、Aと自分との違いはもはや決定的だ、などというて逃げてしまおうとする。

まじとうは丸之内な輩いなど、ありよなひりど。……、美がそしな見集り犬兄こべつ

たりへばりついて生きていくために磁力や藻にすっかり慣れてしまい、憤懣や怨念をまぎらわす術を心得てしまったのは反対に、Aが最後まで慣れることも術を心得ることもしなかった、という差があるにすぎないのだ。評論家ぶってAの犯罪を云々することなど、だからむしろ滑稽な話だ。

が、そう考えたあとでもやはり僕は、そんな非妥協的だったAに対して、だらしく妥協的な自分に対してと同様の嘆息を洩らさずにはいられない。きっと今頃Aは、胸が張り裂けそうなほど後悔しているに違いないのだ。実際、三十数万というじつにつまらぬ盗みと引き換えに彼が失ったものは、余りに大きすぎる。仮りにそれを覚悟にあえて上司のクレジット・カードを盗用したにしても、彼は今後の人生のなかで、そのときには想像もつかなかった自分の傷の大きさに気付き、狼狽することになるのだ。そして傷を癒すことよりも、いつそうそれを深め拡大していく方向に走っていくことになるかもしれない。

それにしても僕は、Aのようににはならないだろうが、Aと同様の気持を抱え持って、これからもひたすら現実へばりついて生きていくしかない自分に、あらためて厭気がさしてしまう。そういう自分をいくら軽蔑しても、だが僕は、心に鬱積したものを何かで薄めまぎらわす術を決して捨てたりはしないだろう。ひょっとすると、今のところまだ何とか正常な性能を保っている触角を、自分の手でへし折るぐらいのこともしでかすかもしれない

い。もっともその触角も最近はずっかり環境に馴染んで、余程のことがない限りピクリとも動かなくなったが。——ともかく急激な自滅の途を選んだのがAとするなら、緩慢なそれを選んだのがこの僕であるというだけで、現象は変わっても本質はさして変わりはいないのだ。……

重い頭がまたさらに重くなっていく。だがそれは徐々に眠りに引き込まれていく兆候のせいだった。電車の規則正しい振動に身も心も任せて、僕は糞尿の中に頭を突っ込んでいくみたいに酔いつぶれていく。尻がソファアのステイムでホカホカ暖かい。……そしてふと眼が醒めると、駅員のいかにも面倒臭そうな声と手で、意識と軀を強く揺さぶられている最中だった。

「お客さん。ああ、こんなに酔っ払ってしまって、イヤになっちゃうなあ。ホラ、終点ですよ、シューテン！」

僕は牛のようにノロノロ立上り大きく背伸びをしたあと、突然何かを思い出したようにせかせかと電車を降り、ひと気のないホームを歩き出すのだった。

二十七歳という年齢は、考えようによっては、人生これから、なのだろう。人にもよくあつる。だが美をそうあつる度こそ燃つてしまふりだ。これからいつか可がやれる

のだろう、と考えてしまう。というよりも、まだ何かやることが残っていたのだろうか、とうんざりした気持ちになってしまう。会社に入ったとたん、僕の人生は、まるで生きたまま冷凍庫でカチカチにされた魚みたいにな、経過する年月に関わりなくじっと同じ状態を保っているような気がする。何かをやってみようという気持ちになったことは、この二、三年一度もなかったし、今後もないだろう。だいたい心を緊張させたり充足させたりということは、二十七歳という年齢にしてすでに、遠い過去の記憶のなかに消え去ってしまったかのようなのだ。そういえばAも僕と同じ二十七歳だった。奴は少なくとも僕より進んでいる。僕と違って、今までやったことのないことを新しくやったんだから……

と、一カ月ぐらい経った頃には、僕は深刻さの一片も感じずに、そんなふうにAのことを勝手に美化して考えはじめていた。Aはすでに僕にとって近いどころか、完全に異質の存在になりかけているのだった。噂によれば、一年にひとりぐらいは会社の中にAのような人間が現われるのだそうだ。別に珍しいことではないらしい。ということは逆に、会社は毎年だいたいひとりずつAのような不良人間を外部に産み落としている、ということでもある訳だ。たまたま僕がAにならなくて済んだというだけで、不意にAになってしまう状況は、だから常にあるわけだ。とはいっても、もう僕はそんなことを真剣に考えたりはしていない。いやそのことに限らず最近僕は、ものごと全体をあまり深く考えなくなっ

た。考えることが阿呆らしくなったのだ、そうぬけぬけと言える程でもないが、Aが会社から消えて以来、何かを忘れようとするみたいに仕事に没頭するようになったのだ。

没頭……それは頭の中にある全てのものを忘れさせてくれる。そう、僕が何よりもまず忘れたいことは、自分がまだ二十七歳という年齢で、これから死ぬまで気が遠くなるほど長い時間を生きつづけなければならぬ、ということである。そのことは、周囲を見まわせば蟻のようにゾロゾロいる、僕の人生の未来図を想起させる人間たちから眼を逸らしたい、ということでもある。十年経っても二十年経っても、僕はこの会社の社員でありつづけるだろう。仮りにここを辞めたとしても、どうせ他の同じような会社の社員であるだろう。どう転んだところで企業に雇われ毎月給料を貰ってしか、生きていけない人間であることには変わらない。そんな人間が日本の人口の大部分を占めているのだから、僕が早々と諦めてしまうのも、ちっとも不思議はないのだ。社会の仕組みが、大量の僕と同類の人間たちの上に成り立っており、もともと僕はその大部隊の一員になるために飼育され、訓練されてきたようなものなのだから。

しかし人間にとって最も耐えられないことは、十年経ったらこうなる、二十年経ったらああなる、と現実にしたきたモデルを終始眼の前に見せつけられていることだ。つまり会社の中をひと通りみわたせば、そこには業自身の人生の縮図がちゃんとある、というわけ